

高尾城跡調査成果報告会資料

令和7年7月13日（日） 金沢市埋蔵文化財センター

1. 調査概要

高尾城は標高約 186m の富樫丘陵先端部一帯に築かれた山城です。浄土真宗門徒による長享2年（1488）の一向一揆の際、攻められた加賀国守護・富樫政親がこの城に立てこもって敗れたことにより、加賀が「百姓ノ持チタル国ノヤ(ヨ)ウ」となる歴史的事件の発端となったことで広く知られています。

城跡は「ジョウヤマ」と「コジョウ」と呼ばれる地区にあります。「ジョウヤマ」地区にあった城の主要部分は過去の土取りにより失われ、一部が高尾城址見晴らし台として残るのみですが、「ジョウヤマ」の背後にあって細尾根で結ばれている「コジョウ」地区には主郭や曲輪、堀切など城郭遺構が残されています。

金沢市では令和4～5年度にかけて、「コジョウ」地区に残る遺構について測量調査や発掘調査を実施し、高尾城跡の歴史的変遷を探りました。

令和4年度	航空レーザー測量	→城郭遺構の分布状況を立体的に視覚化 →正確な平面図を作成
令和5年度	発掘調査(4箇所計約 50 m ²)	→山城として機能していた当時の形状や規模を把握 →出土品から山城の年代を特定
主な遺構	堀切、切岸、主郭、曲輪（平坦面）、集石遺構	
主な遺物	渡来銭(熙寧元宝)、土師器皿、珠洲焼すり鉢、古瀬戸平碗	



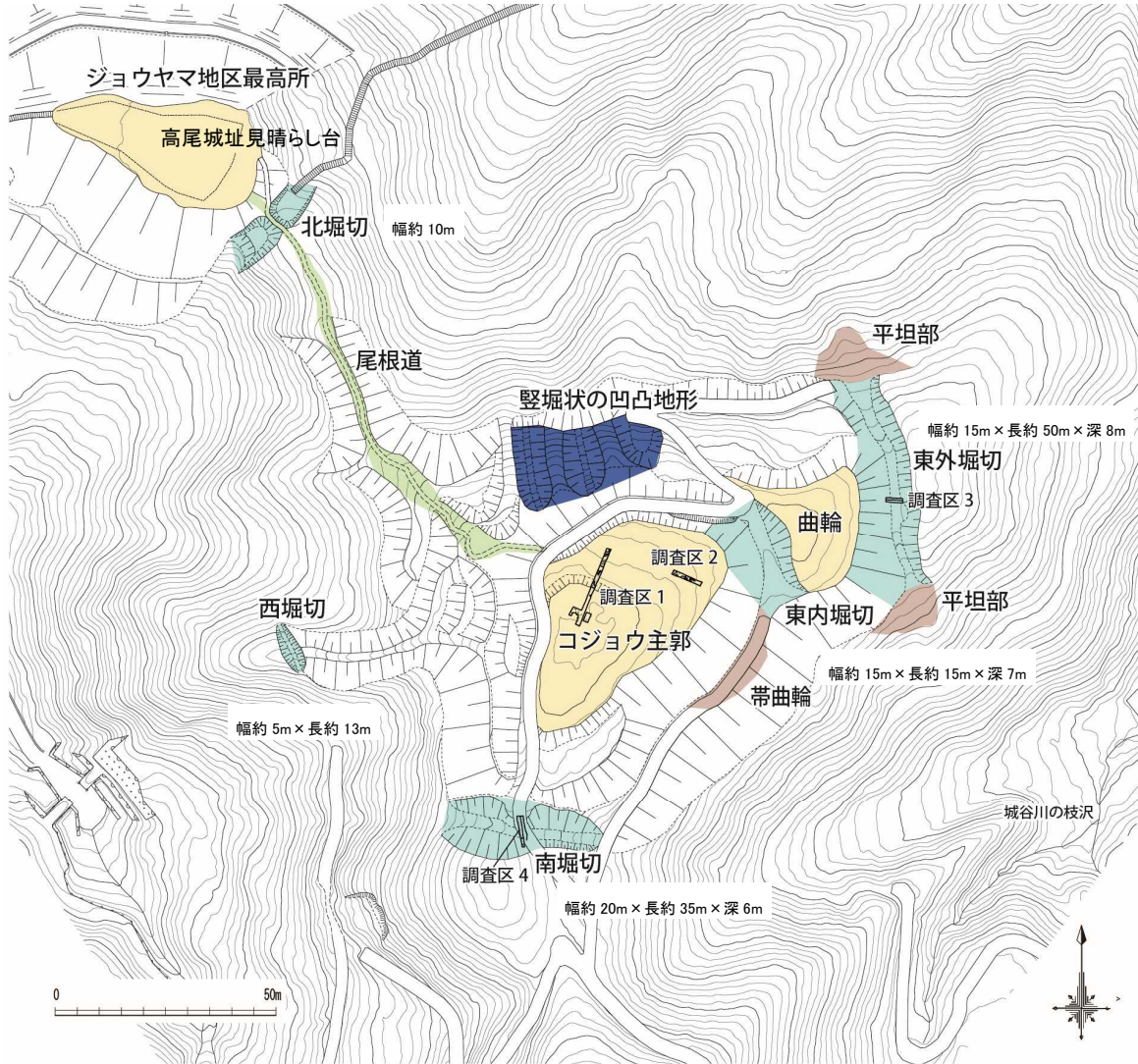
高尾城跡（コジョウ地区）の位置

【用語解説】

曲輪(くるわ)	尾根や斜面を造成した平坦面で、土のい・切岸・堀などで区画された区域
主郭(しゅかく)	城の中で中心になる曲輪で、近世城郭の本丸にあたること
堀切(ほりきり)	尾根を伝って進入する敵を防ぐため、尾根を断ち切り空堀としたもの
切岸(きりぎし)	斜面下からの敵の侵入を防ぐため、斜面を削って急傾斜の断崖としたもの
堅堀(たてぼり)	斜面に対して縦方向に溝状の堀を掘り敵の横移動を防いだもの

2. 高尾城跡（コジョウ地区）の遺構と調査位置

コジョウ地区では主郭、4箇所の堀切、曲輪、帯曲輪、連続する堅堀状の凸凹地形等が知られています。発掘調査は主郭に2箇所と東外堀切・南堀切に各1箇所、計4箇所で実施しました。



高尾城跡（コジョウ地区）の遺構と調査位置

3. 発掘調査成果

◆主郭（調査区1・2）

・^{とらいせん}渡来銭「^{きねいげんぼう}熙寧元寶」と中世の陶器や土師器皿が出土

概要 主郭は標高約 186m の小高い丘陵を頂点とするコジョウ地区の最高所で、頂上付近には約 500 m²の平坦面(主郭上段)が広がっています。主郭の北東側および南東側では、一段下がった位置で標高 180m 付近まで緩やかな斜面(主郭下段)が続きます。

主郭北西部の上段から下段にかけて掘削した調査区1では、上段の地表下約 20cm で中国製の渡来銭「熙寧元寶」が出土しました。「熙寧元寶」は 1068 年から鑄造された中国北宋の貨幣です。中国の貨幣は貿易により輸入され、渡来銭として日本国内で広く流通していました。

主郭上段では地質が硬化する地表下約 40cm まで掘り下げたところ、礎石のような上面が平坦な石

が検出されました。しかし、周囲からはこの石と並んで建物跡を示す石は確認されませんでした。

主郭上段から主郭下段にかけては、現在、比高差約3mの緩斜面となっていますが、発掘調査の結果、主郭上段と主郭下段の間が比高差約 2.2m、最大斜度約 55～60 度の切岸となっていること、切岸下の下段は高低差約 50cm の二段の帯状平坦面で構成されていることが判明しました。

下段平坦面のくぼ地には人頭大の川原石が多数集積されていました。集石の周囲や平坦面上から出土した土師器皿や古瀬戸平碗の年代から、14 世紀後半～15 世紀前半代の遺構であると考えられます。また、集石より上層では 14 世紀末～15 世紀後半代の珠洲焼すり鉢や 15 世紀末～16 世紀代の土師器皿細片がみつかっています。

主郭下段の調査区2では、斜面に盛土して平坦面を造成していることが確認されました。

◆堀切（調査区 3・4）

・現地表面より 1 m 以上深い位置で堀底を確認

→従来考えられていたより規模が大きく、高い防御力を有していたと判明

① 東外堀切

概要 高尾城跡東面を流れる城谷川から主郭へ登る稜線を断ち切るように掘られた南北方向の2本の堀切(東外堀切・東内堀切)のうち、東外堀切は幅約 15m、長さ約 50m、深さ約8mを測り、コジョウ地区で最も大規模な堀切です。東外堀切の底を掘削したところ(調査区3)、堀底は平坦で堀底幅は約 2.7mとなっており、現在まで堀底に 1.8mの土砂が堆積していることが判明しました。堀切の外側では固い砂層を約 50 度の傾斜で削り出した切岸の斜面となっていることを確認しました。

② 南堀切

概要 コジョウ地区の南(搦手)側稜線を断ち切るために掘られた東西方向の堀切で、幅約 20m、長さ約 35m、深さ約6mを測ります。

調査区4では堀切の一部が南北方向に造成された造林作業道により約1mの厚さの盛土で埋められていますが、地下に堀切遺構は比較的良好に残っていることを確認しました。堀底の断面形状は丸く、調査区内では堀幅約 5.5mまでを確認しました。造林作業道で埋められる前の旧表土から堀の最深部までは約 1.2mの土砂が堆積していました。なお、堀外側斜面の傾斜は約 30～55 度、堀内側斜面の傾斜は最大約 20 度でした。

4. 調査でわかったこと

- ① 高尾城(コジョウ地区)には、主郭、曲輪(平坦地)、切岸、大規模な堀切等が良好に残されており、高尾城のジョウヤマ地区と密接な関係を持つ城郭遺構であることを確認できました。
- ② これまで、コジョウ地区の城郭遺構については、縄張り研究の視点から、16世紀後半に一向一揆軍が築いたものと評価されてきましたが、今回発掘調査を行って出土品を確認したことにより、富樫氏治世の 14 世紀後半～15 世紀代を中心とした時期に使われていたことが明らかになりました。
- ③ 少数の細片のため詳細はわかりませんが、15 世紀後半～16 世紀代と考えられる遺物も出土していることから、高尾城が落城した長享2年(1488)の一向一揆の際にもコジョウ地区が山城として利用された可能性が高まりました。
- ④ 主郭北側にみられる豎堀状の地形は、16世紀後半の一向一揆軍による改変の可能性を示唆するものですが、今回の発掘調査において同時期の遺物は確認されておらず詳細はわかりません。



主郭上段（調査区 1）の平坦面



主郭下段は二段の平坦面で構成される



東外堀切（調査区 3）現地表下約 1.8m 埋まる



南堀切（調査区 4）旧地表下約 1.2m 埋まる



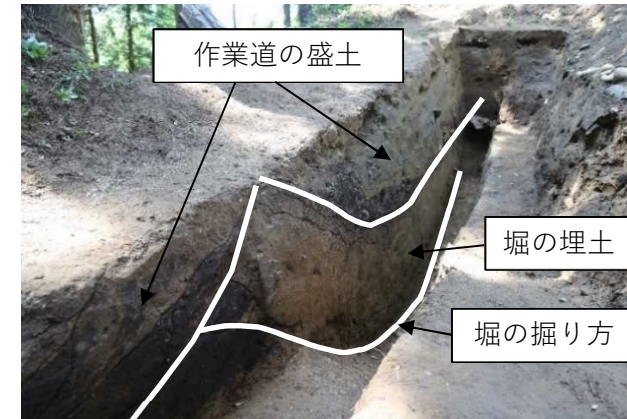
主郭（調査区 1）出土遺物



主郭下段のくぼ地に人頭大の川原石を集積



東外堀切 埋土はほぼ均質な山砂



南堀切（調査区 4）土層堆積状況

5. 高尾城主・富樫氏の歴史について

富樫氏は、平安時代の代表的な武人として知られる^{としひと}藤原利仁の流れをくむ加賀斎藤氏の一族で、野々市市と金沢市を流れる高橋川中流域の富樫郷を拠点としていました。

藤原利仁から7代目の家^{いえ}国^{くに}がはじめて「富^と樫^{がし}介^{のすけ}」を称し(富樫氏の始まり)、康平6年(1063)には野々市に館を築いたと伝わります。

加賀地域で勢力をもっていた林氏が、承久 3 年(1221)の「**承久の乱**」で朝廷方について衰退したことにより幕府方の**富樫氏**が**加賀武士団の筆頭**となりました。これ以後、守護を歴任する北条氏一門の代官を富樫氏が務めることになりました。

富樫高家は南北朝内乱期の戦功から、建武 2 年(1335)加賀国の守護に任じられ、守護所を野々市に置きました(富樫館)。

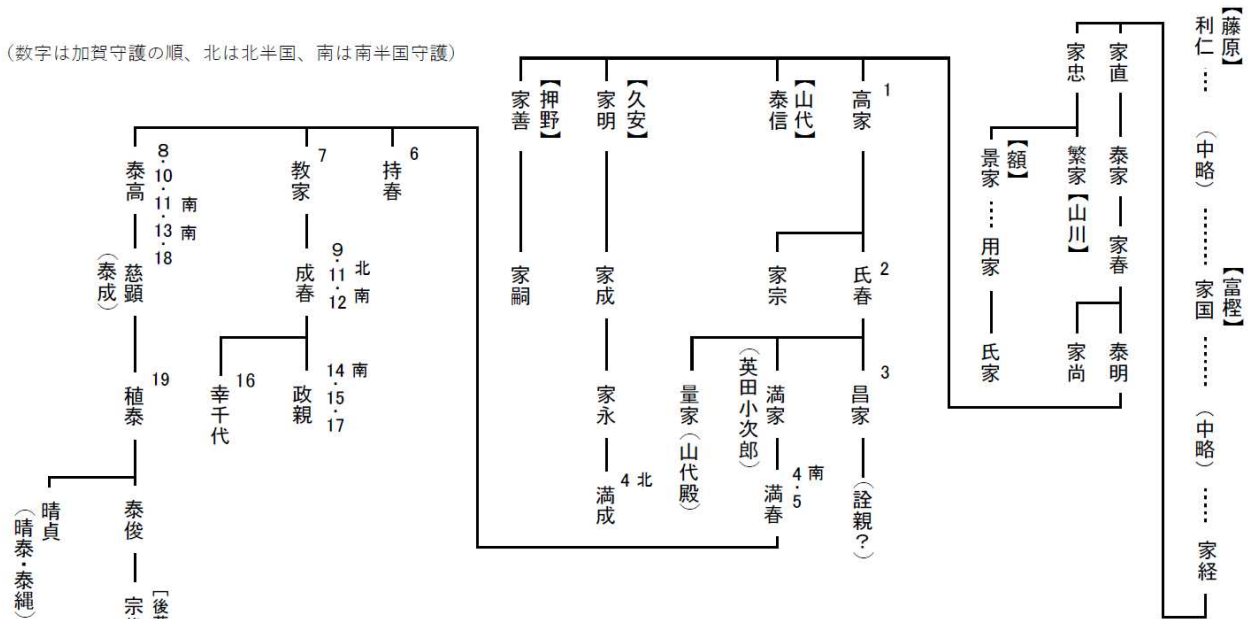
嘉吉元年(1441)、富樫^{のりえ}教家が将軍の怒りに触れて失脚したことを発端に富樫氏の分裂が始まりました。

長享 2 年(1488)、加賀の一向宗門徒と一族の富樫泰高^{やすたか}の攻撃により、守護富樫政親^{まさちか}が敗北し、籠城した高尾城も落城しました。

戦国期には、**富樫泰高**とその子孫が加賀国の守護職を引き継ぐものの、実権は一向宗門徒がもち、富樫氏の勢力は衰えていきました。

元龜元年(1570)、室町將軍足利義昭の加賀の賊討伐の上意を受け、織田信長に呼応した守護**富樫**^{きた}**貞**は、金沢市の伝燈寺で一向宗門徒に討たれ、富樫氏は滅亡しました。

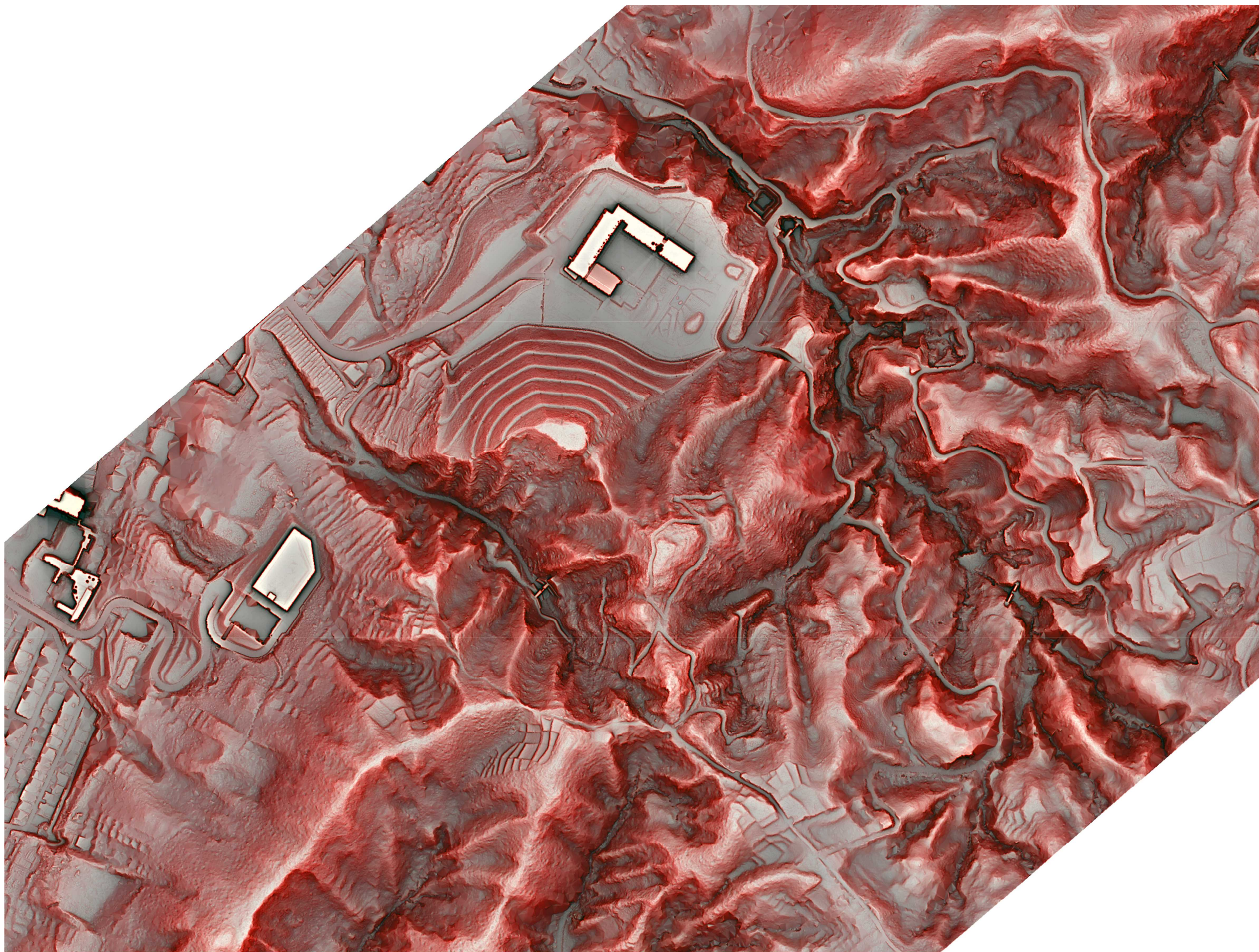
【承久の乱】 後鳥羽上皇が鎌倉幕府の執権である北条義時に対して起こした、朝廷と鎌倉幕府との間の対立抗争のことです。上皇は敗北し隠岐に流されました。



富樫氏の略系図

年号 (西暦)	富樫氏に関係する主な出来事	日本史の主な出来事
延喜15年 (915)	富樫氏と林氏の祖先である藤原利仁、鎮守府将軍に着任	
康平 6 年 (1063)	富樫家国、野々市に館と神社（現在の布市神社）を建立 「富樫介」を名のり天皇家や公家の警護として仕える	
治承 4 年 (1180)		源頼朝・木曾義仲、平氏追討のため挙兵 (治承・寿永の乱)
寿永 2 年 (1183)	富樫家経、北陸道を南下する木曾義仲の軍に加わり、倶利伽羅峠で平氏軍を撃破	倶利伽羅峠の戦い
寿永 3 年 (1184)	富樫家経、木曾義仲に従い京へ行くが、源義経に敗れ加賀に戻る	
文治 3 年 (1187)	源義経一行、京から奥州へ逃れる途中、弁慶が富樫の館に立ち寄ると伝わる	源義経、兄頼朝によって京を追われる
建久 3 年 (1192)		源頼朝、鎌倉幕府を開く
承久 3 年 (1221)	上皇方の林氏が衰退、幕府方の富樫氏は勢力拡大 富樫氏、京の治安維持に活躍	鳥羽上皇、鎌倉幕府追討のため挙兵 (承久の乱)
永仁元年 (1293)	富樫家尚、永平寺(福井県)から徹通義介を招き、野々市(本町一丁目付近)に 大乘寺を開く(加賀で最初の禅寺)	
元応 2 年 (1320)	富樫泰明、加賀守護の代理として白山本宮を参拝	
元弘 3 年 (1333)		鎌倉幕府が滅亡
建武元年 (1334)		後醍醐天皇、建武の新政を開始
建武 2 年 (1335)	足利尊氏、富樫高家を加賀の守護に任命(富樫氏最初の守護)	足利尊氏、武家政治を行うため挙兵したが、 九州へ敗走
建武 3 年 (1336)	富樫高家、九州筑紫多々良浜の戦いで勇敢に戦った尊氏七騎の一人と伝わる	足利尊氏、多々良浜(福岡市)の戦いに勝利
暦応元年 (1338)	富樫高家、尊氏の側近として室町幕府の誕生に尽力	足利尊氏、室町幕府を開く
貞和元年 (1345)	足利尊氏、富樫氏春(高家の子)を富樫新庄(野々市市新庄付近)の地頭に任命	
貞和 2 年 (1346)	富樫家善(押野殿)、大乘寺に押野荘の土地を寄進	
観応元年 (1350)	富樫高泰、富樫氏出身の大乘寺第三代明峰素哲の供養のため、大乘寺に高安軒 (野々市市本町 1 丁目付近)を建立	
応安 2 年 (1369)	富樫昌家(氏春の子、北朝方)、越中(富山県)の桃井勢(南朝方)と野々市で撃退	
至徳 4 年 (1387)	富樫昌家没。斯波義種が加賀守護に任命され、この後27年間支配	
明德 3 年 (1392)		南北朝合一
応永21年 (1414)	富樫満春と富樫満成、斯波義種の失脚により半国ずつの守護に任命	
嘉吉元年 (1441)	富樫教家(満春の子)、将軍足利義教の怒りにふれ、弟の泰高が守護に 将軍義教の死で、教家と泰高兄弟による守護をめぐり争う(富樫一族内紛)	赤松満祐、将軍足利義教を殺害(嘉吉の乱)
嘉吉 2 年 (1442)	管領畠山持国、富樫成春を守護にして父の教家を復権させたが、守護であった 富樫泰高が抵抗し、翌年に争いが起こる	
文安 2 年 (1445)	管領細川勝元が富樫泰高を守護に復帰させたが、再び富樫一族が争ったため、 勝元、富樫成春(北加賀半国)と泰高(南加賀半国)を半国守護とすることで争 いを収める	
長禄 2 年 (1458)	赤松氏、神璽(天皇の印)を奪回した功績によって北加賀半国の守護に 富樫教家・泰高、協力して赤松氏に抵抗し北加賀の各地で争いを起こす	
長禄 4 年 (1460)	富樫泰高、南加賀半国の守護を富樫成春に譲るが、成春の死により 3 年後に復帰	
寛正 5 年 (1464)	富樫泰高、隠居して富樫政親に南加賀半国の守護を譲る	
寛正 6 年 (1465)	将軍足利義政、後花園天皇の仙洞御所で花見の宴を行い、この時新作の能『安宅』 が上演されて安宅の関に「富樫」が登場	
応仁元年 (1467)	富樫政親、大乱当初は西軍(山名方)であったが、将軍義政の勧めで東軍(細川 方)に加勢	応仁・文明の大乱(1467～77)
応仁 2 年 (1468)	富樫政親、赤松氏が播磨の領地(兵庫県)を取り戻して帰ると、加賀一国の守 護に	
文明 3 年 (1471)	富樫政親、弟幸千代と対立。越前の朝倉孝景により幸千代が加賀守護に 蓮如が吉崎御坊(福井県)を開き、北陸に浄土真宗の教えを広める	
文明 6 年 (1474)	富樫政親(本願寺派)と弟幸千代(高田専修寺派)が争う(文明の一揆) 政親、勝利して守護に復帰するが、本願寺派は大きな力を持つ	
文明 7 年 (1475)	本願寺派の一部、富樫政親と争いを起こしたため責任を取り蓮如は吉崎を退去	
長享 2 年 (1488)	富樫政親、将軍足利義尚の近江六角氏討伐に出陣したが、兵糧米や兵を国に求 めたことで、加賀で大規模な一揆が起こる 政親、高尾城に立てこもるが、富樫泰高が総大将の一揆方の攻撃を受けて、自 害(長享の一揆) 泰高、政親の葬儀を大乘寺で行い、翌年、守護に	長享の一揆
享禄 4 年 (1531)	富樫植泰(泰高の孫)、本願寺派の内乱から起こった争い(享禄の錯乱・大小一 揆)に敗れ越前に逃走	
元亀元年 (1570)	富樫晴貞(植泰の次子)、将軍足利義昭の命により織田信長に加勢したため一揆 方から攻撃。晴貞と子の祖雲和尚は伝燈寺(金沢市)で討死 晴友(晴貞長子)、越中小杉(富山県)に逃れ小杉と名を改め、後に前田利長に 仕える	織田信長、本願寺(一向一揆)と10年に及ぶ 戦い(石山合戦)を始める
天正 2 年 (1574)	富樫泰俊(植泰の長氏)、子の植春・天易侍者が越前で加賀一向一揆方と戦い、 金津城で自害。宗俊(泰俊の三子)、越前から逃れ、後藤弥右衛門と名を改め押 野に居住	
天正 8 年 (1580)		織田信長軍、一向一揆勢を撃破

富樫氏略年表 (富樫氏頌徳会2016『八曜の剣 加賀・富樫氏の物語』より抜粋)



航空レーザー測量で作成した微地形表現図（赤色立体図）